

北近江で最初の発掘

杉沢遺跡

明治時代以来、杉沢では石器が出土することが知られていました。大正13年(1924)に郷土史家・中川泉三なかがわ せんぞう ぎよぶつ せつ きが御物石器と磨製石斧を『考古學雑誌』(13-14)に紹介したことで本格的な調査が始まりました。昭和初期には島田貞彦かしくらりょうきちや柏倉亮吉が紹介しています。

杉沢遺跡の発掘調査は昭和13年(1938)に京都大学助手(当時)の小林行雄らによって「これらの石器を伴出する土器の性質を確かめる」ことを目的に、北近江で最初の発掘調査が勝居神社付近かちいでおこなわれました。調査の結果、2組の縄文時代晩期後半(約2,500年前)の「合せ口甕棺」あわぐちかめかんを検出し、以後、『通論考古学』や『日本考古学辞典』などに紹介され、杉沢遺跡を一躍有名なものとなりました。昭和29年(1954)には、京都学芸大学(現京都教育大学)による調査がおこなわれ、合せ口甕棺1組が出土しました。

その後、34年経過した昭和63年(1988)のほ場整備事業に伴う調査では、縄文晩期前半の良好な一括資料が出土しています。平成3年集石遺構の確認、平成7年には1組の合せ口甕棺と縄文土器片が出土し、土器をふたにした「合せ蓋棺」ふたかんに類似した状況を確認しました。さらに、平成15年には2組の合せ口土器甕棺が出土し、ほぼ完形の棺内からは焼けた人骨片が出土しました。もう一方の晩期中葉の甕棺は、杉沢遺跡最古の甕棺です。これまでに11基の土器棺が出土しています。晩期前半から終末まで、地点を移動しながら遺跡が長期間継続していることがわかっています。



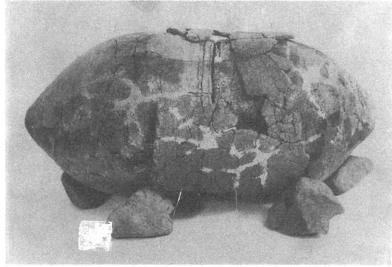
合せ口甕棺 (平成15年)



調査風景(昭和13年)

合せ口甕棺と中川泉三(昭和13年)

杉沢遺跡の個々の発掘の規模は大きくありませんが、その出土資料は良好かつ特徴的で、石器類では、石鏃や石皿などの一般的な生活用具のほか、多頭石斧や大小の石棒、石剣、鏢形石器、玉、県内唯一の御物石器などの儀礼的性格の強い石製品が多数出土しています。土器は、中期末の近畿圏に広く分布した北白川C式のほか、中部山岳地域からの搬入品や、晩期には二枚貝条痕こそもないものの、東海系の影響と思われる器形をした土器も出土しています。甕棺では、近畿の土器は篠原式が1対出土しているのみで、ほかの凸帯文期の土器は東海系の五貫森式であることから東海の影響が強まったと考えられます。



合せ口甕棺

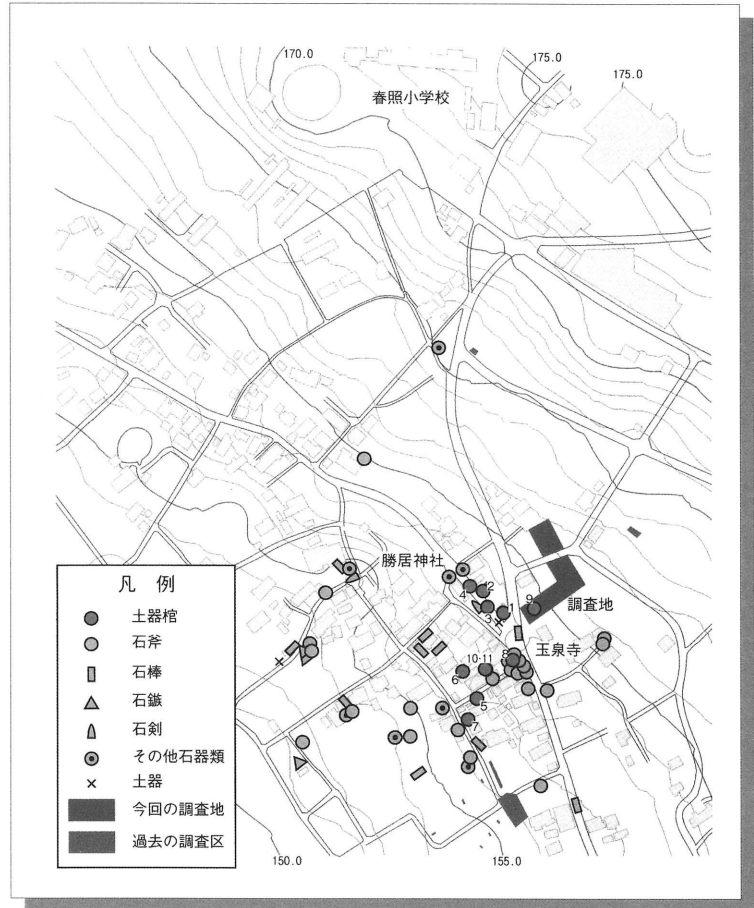
合せ口甕棺は、縄文時代晩期中頃に北陸や湖西地方に現れ、晩期終わりごろに東海地方に広がった埋葬方法です。両方の地域を結ぶ接点に杉沢遺跡があります。



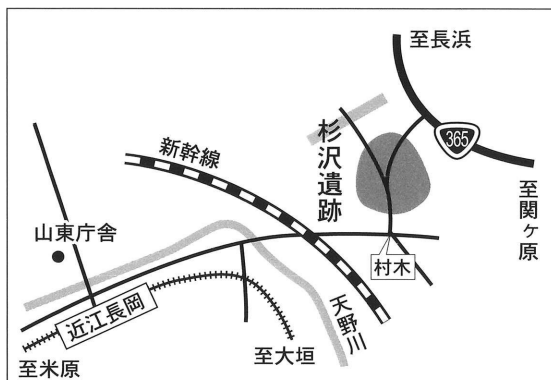
御物石器



立命館大学が指導した夏休み発掘体験



杉沢遺跡と石器分布図



杉沢遺跡

- 所在地 滋賀県米原市杉沢
- アクセス JR東海道線近江長岡駅下車。徒歩約30分。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1050-1 TEL.0749-55-8020
平成24年度 市内遺跡保存活用事業